幻視の森

国見炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻視の森

【Ｎコード】
Ｎ８３９０Ｍ

【作者名】
国見炯

【あらすじ】
一之宮琉依架。２８歳性別女。凛々しい見た目を活かして小さな店を切り盛りする中、十代目眞王と呼ばれ連れてこられた先は悠宴（７代目眞王命名）と呼ばれる星だった。
そこには眞族に覇王と呼ばれる存在。そして、３人の王たちによって統治されている人間たち。どうやら３人の王は眞王の寵愛を狙っているらしいが、持ち前の凛々しさとマイペースでのらりくらりとかわす日々。
そんな眞王と彼らの物語りです。

※一応R15をつけてあります。

0話・誘拐事件発生（前書き）

一人称になったり三人称になったりする物語りのプロローグ的な話しです。

0話・誘拐事件発生

その日、私はいつものように夢を見た。

私は男性と対峙しているけど、敵対とかそんなんじゃなく、超がつく程の友好的な笑みを向けられている。

眞王（マオウ）様。

１０代目眞王様。

貴方様をお迎えにあがりました。

変な事を口走りながらも、満面の笑みで私に手を差し出す長髪、銀髪、切れ長の目が色っぽい長身のイケメン兄ちゃん。

あ～。眼の色は翡翠色。

染めてカラーコンタクト？

なんて思ってみたけど、うん、何か違うねって思う。

不自然さがない自然な色合い。

まさか地球でこんな色彩に出会えるとは。

…夢だけど。

「夢ではありませんよ」

すると、イケメン兄ちゃんは私の思考を読み取ったかのように、笑みを濃くして私の身体を引き寄せるというセクハラ行為を軽くかます。

美形だと許されると思っているのかどうかは不明だけど、確実にこの兄ちゃんはこの顔で得はしてるんだろう。でなければ人の腰に手を添えて引き寄せるなんていう芸当は無理無理。

かっこいいと評判の私ですらしなかった行動。

いや…まぁ、私の場合は面倒だしそっち系の趣味がなかったからだけど。

でも173cmもある女性にしては規格外の私が見上げるとなると、身長は185ぐらいありそうだぞ。ふむ。観賞用だぁねぇ。

私が容赦なく判断を下すと、イケメン兄ちゃんの頬が引き攣った。

これで決定。私の心を読み取ってる。

となるとプライバシーの侵害もいい所だな。私ってこう見えても結構壁作るタイプだよ？　って事で、とりあえず頭下げて謝っとこうか??

あ…もう心は読まないでね。流石に不快だしねぇ～。

自分の夢だと思って安心してた心を閉ざすと、頭を下げてもらおう、なんて言ってた時とは違った表情を浮かべる。どちらかというと焦ってる感じ。

「心が読めないなんて――そんなッッ！?」

いやいや。心が読めない程度でな～に焦っちゃってんの？
んなものは当たり前ですよ？
まったく。最近の若いのはそんな事もわからない？？
完全に呆れた表情を浮かべた私に、兄ちゃんは観念したかのような何かを決意した光を瞳に宿す。
ん？　何？？

「敬愛する眞王様。
夢での逢瀬で心を通じ合わせてから招きたかったのですが…仕方ありませんね。私たちはもう、覚醒した貴方様と離れる事なんて出来ません」

んん？？
雲行きが怪しくなってきたぞ。夢なのに。
どうやら心を読むというのは、通じ合わせやすくする目的があったみたいだけど、激しく何か間違ってないか？
そして覚醒って何？
私は貴方たちなんかこれっぽっちも見たこともないし、知らないんだからほっておいてくれないかな。
あー…疑問ばっかり。疲れる。

どうせなら可愛い子を相手にする方が楽なんだけどさー。
物も買ってくれるし。
お客様だし。

そしてどうやら、もう心は読めないらしい。

やっぱ拒絶したのが良かったか。

けれど、それとは反比例して私の拒絶はどうやらイケメン兄ちゃんを追い詰めたらしく、腰に回した手に力が入ってる。
そういえばこんな格好だったね。抱きしめられているというかなんというか。
現実味がないから気にしてなかったけどさ。

「あのさぁ。私はマオウなんていう名前じゃないですよ？　貴方の名前も知らないし。仲良くなりたかったら初めまして、こんにちわからじゃない？？」

漸く、私は言葉を音として発する。それは明確な意思を持ち、相手へと伝わるはず。だったんだけどね。
既に聞く耳をもっていないらしく、兄ちゃんは首を横へと振る。

「私たちは十分待ったのです。宇宙を統べるただ一人の眞実（シンジツ）の王――眞王様である貴方様の魂を。
眞王が座るべき玉座は３００年空のまま。そう。９代目が亡くな

ってから３００年……もう十分でしょう？」

「ちょっとそこのイケメン兄ちゃん。人の話や存在やらなんやらその他諸々も考慮しよっか？」

完璧に、目がイッテル。

寧ろ９代目が亡くなって３００年って――そんなもん私が知るはずないだろう。

しかもスケールが大きいなぁ。

宇宙って何？

シンジツの王ってさぁ……なんか色々含みがありそうで嫌なんですけど如何でしょ？

流石にやばいと思った私は、両腕を突き出して兄ちゃんの腕の中から脱出を試みるけど、元々の筋力が違うのか、私が疲れるだけで終わってしまう。体力はあるつもりなんだけど、やっぱこの胸板を目の前にすると華奢なのか。

なんかファンタジー系の魔法使いの兄ちゃんっぽいから、筋力は０かと思ってたらそうでもないらしい。

この横で緩く縛った髪なんか引っ張りやすそうなんだけどさ…綺麗でなんか引っ張れないんだよなぁ。

「ここまでくると変質者？」

にんまりと笑い、ボールを蹴るんじゃなくて膝でリフティングするかのように上へと持ち上げる。

まぁ、ぶっちゃけ狙うっつったら一箇所でしょう。

「ちっ、避けたか」

イケメンは殺気を感じたのか、私の急所への攻撃を身体を離す事で辛うじて避けた。目的はそれだったけど、折角蹴ろうと思って膝を突き上げたのに無駄に終わった私の目線は、イケメン兄ちゃんへと向けられている。

さぞかし物騒な視線だろう。

否定はしないさー。だって狙ってるし。

「眞王様…」

「眞王ってヤツじゃないけど、なぁに？」

「愛が痛いですよ？」

「まだ食らってないでしょ？」

ジリジリと、逃げる事も忘れて距離を詰める私と、ちょっと本気で距離を取りたがってるイケメン兄ちゃん。

すると、突然上を向いたかと思うと、

「眞王様……お時間です」

何処かホッとしたように、安堵を浮かべた笑みで紡がれた言葉に、私は舌打ちで応えた。

そもそも、誘拐犯に何を言っても無駄だったのだ。

この夢のような空間からの脱出方法なんて、私は知らない。知らないから、逃げようがない腹の立つ事実。

背筋に汗が伝うが、それが流れた傍から冷えていく。

異様な空気に、私の脳裏に手遅れな警報音が鳴り響いていた。

空間が歪んで出来たソレ。

微かに覗ける風景はファンタジー。ゲームや小説なんかである森。大自然が目に優しい～、なんて軽口を叩ける心境は既に通り越し、通り越し、私は笑っている。

「はっはっは。真性の変質者か。性質が悪い」

何処か恍惚とした表情で私の暴言もどきすら受け止める兄ちゃん。変質者、変態等々、私の脳裏に浮かんでは消えていく言葉は否定出来る所は一つもなく、私の中でイケメンだけど残念な人という位置づけになったのは仕方ないだろう。

変態イケメンに再び抱きしめられたまま、私の身体は歪んだ空間に引っ張られるように視界がぶれていく。

３Ｄ映像を肉眼で見続けているような不快な感覚に、私は気分を優先させて目を閉じた。変態の前で目を閉じるという行為は不安が残るものの、これで気持ち悪くなって行動が起こせない方が怖い。

そう…これは次の手をスムーズにいかせるための先行投資みたいなもの。

仕方ない。

自分自身に言い聞かせながら、私は三半規管が揺れる感覚にこれ以上ない程眉根を寄せた。

待ち望んでたなら、もうちょい移動方法考えたら？

なんて私が思ったのは、決して間違ってないだろう。

1話・覇王登場

揺れて揺れて揺れすぎて、一体何が揺れてるのか分からなくなってきた頃、眼下に広がるのはどこぞの王様が住んでてもおかしくないような宮殿。

少なくとも海外旅行にさえ縁のなかった私は、物語でしか見た事のない光景。

しかしこの浮遊感といい、身体で感じる風といい――現実味があり過ぎて、どうしようかと珍しく迷ってしまう。

相変わらず腰に手の感触を感じるけど、それはサラッとマルッと無視を決め込んで…さて、どうしよう？

結局は無視を決め込んだ相手しか情報収集出来ない事には気づいてはいるが、やっぱり変態から歪曲した情報なんか仕入れてもなぁ。なんて思ってたら、変態兄ちゃんが悲しそうな眼差しを向けてきた。

心は読めなくても、表情に出まくってたから流石にわかるらしい。

「酷い人ですね」

「貴方の思考回路よりはマシなんじゃないかな」

一言で切り捨て、落下してる間にこの世界の風景を記憶へと焼き付ける。何処に何があって、距離はどのぐらいか。人影は見えるか。獣はいるか。等など。逃げる時には重要になる逃走ルートを確保しなければいけないけれど、肝心の歪みは何処かな？と頭上を確認してみる。

ない…か。

目視で確認出来ないだけなのかはわからない。でも、あんな高い場所にあった所でたどり着けないからいいか。別の場所を…なんて見回すと、空間の歪みが消えては現れている事に気づいた。

「ここは幻視の森と言われてます。7代目眞王様がこの星に降臨した際、最初に降り立った地と言われてますね」

「幻視……元始の森？」

ファンタジー系の何かにありそうな名前だけど、その後の説明を聞くと元始の方が当てはまる気がして聞いてみる。

しかし、この星につれてこられた割に、7代目なんだ。眞王って呼ばれるのが降りたの。

「えぇ。元始の森です。ただ、人間たちは幻視の森の呼び名で定着してみたいですけどね」

「人間たちは、ね……それさぁ、迷子になったり幻が見えたりするからじゃない？　あれに巻き込まれて無事な人間っているの？」

あれとは当然、歪みの事。

「いませんね。何処かに飛ばされて終わり、か…五体満足なら幸運でしょう」

サラッとグロイ事言いやがった。つまり、私も気をつけなきゃならないって事か。

「貴方様は大丈夫ですよ。我らが眞王様」

私の表に出にくい表情を器用に読んで、私の欲しい言葉をくれる。

さっきは急に心を閉ざされちゃったから、パニックになっただけ…か。

「さっきから結局は”眞王”で片付くね。眞王って何？」

落下してる間は暇だし、仕方ない。私は腹を括って、目の前の兄ちゃんから情報収集をする事に決めた。

全てを鵜呑みしなければいい。それだけだと切り替える。

「それは宮殿に着いてからにしましょう。貴方に会わせたい者達もいますから」

穏やかな笑みのまま私の髪を一房手に取ると、それにそっと口付ける。うん。これは親愛の行動かな。でもなぁ、それはね。と手で制する。

「髪は止めない？　今はゴムが切れちゃったからこうだけど、キッチリしてるのが好きなんだ。触ってボサボサにしないでくれないかな」

嘘だけどね。

休みの日なんか適当に縛ってゴロゴロしてるから、髪なんかグチャグチャのボサボサなんてのは日常の範囲だ。

「綺麗な髪ですよ。ほら。サラサラ」

「サラサラねぇ。何か髪の色が変わってるみたいなんだけどさ、これってこの場所の所為？」

今気づくなんて、私も相当パニックを起こしてたのかな。

腰まである髪の先を手に取って見てみるけど…真っ白。寧ろキラ

キラとラメが入っているかのように輝いてるねぇ。
容姿を確認するのがちょっと怖いね、なんて他人事のように呟くと、それについては答えをくれた。
「これは、貴方様の本来の姿ですよ。魂に刻まれた色。今までの色は、擬態に過ぎません」
擬態も何も、日本人は大体黒だから、なんて言葉を言った所で無意味だと、私は確信していた。
なんとなく、どうしてだかわかってしまう。
目の前の変態兄ちゃんの性格が。
頭を抱えたい衝動に駆られるが、相変わらず私の表情は動かなかった。
「眞王様は我ら眞族（シンゾク）を統治する絶対なる者。眞王様にわからない事はないのですよ」
フォローしてくれてるんだろうけど、疑問がまた一つ。小さな疑問だとは思うんだけどさ。なんか気になるんだよね。
「なんで眞王（マオウ）と眞族（シンゾク）で呼び方が違うの？」
私の小さな疑問は、あっさりと解決された。
「6代目様までは眞王（シンオウ）だったんですけどね、7代目様から眞王（マオウ）にしたそうですよ。彼の側近の書記によれば、人間じゃないんだろ？人外だろ？　魔王だろ？　じゃー呼び方は眞王（マオウ）でいいじゃん――と言われたそうですよ」

本当に小さな問題で、私は自分から聞いたのにも関わらずへぇ、なんて小さな声で返した。
7代目の肖像画があればはっきりするんだろうか。彼と呼ばれた7代目は日本人じゃないのかなぁ、なんて確信があって、私は目を細めながら目下へと迫った絢爛豪華な宮殿を見ていた。

「こちらが眞王様の住居となります。すいません。眞王様の住居としては手狭ですね」

心底申し訳なさそうに言う兄ちゃん。
いや？　寧ろ広すぎて落ち着かないんだけど??
今までは2ＬＤＫ。そして目の前の宮殿は部屋数を数えるだけで陽が暮れそうなんだけどさ。

「さぁ、こちらです」

案内された先にあったもの。
ベルベットの真っ赤な絨毯。
華美な装飾品。
扉は大理石だろうか。三階まで達するんじゃないかと思う扉が自動で開く際、両脇を陣取っていた水晶がほのかな光を放っていた。
これで自動扉になっているらしく、重そうな扉がつっかえる事もなくゆっくりと開いた後、私は開き直って足を踏み入れた。
折角の体験、楽しまなければ勿体無いと思考を切り替える。

「人が少ないよね。あぁ、人じゃないんだっけ。眞(シン)が少ないね、が正解？」
「えぇ。我々は人ではありませんから」

微笑む兄ちゃん。
まともに笑えばやっぱ美形だわ、とシミジミと思いながら、私は幾つか両脇を水晶で飾られた重厚な扉を通り抜け、最終的にはだだっ広い部屋へと通された。そこには一人――もとい一眞（イチシン）がいて。何か人で慣れてるから言い難いんだよねぇ。違和感もあるし。
でも人に対しては格下扱いしてるっぽいから、まぁ、面倒でも眞って言っとこ。

「今更眞王か。３００年も現れなかった癖にな」

だけどそこに居た兄ちゃんは、忌々しげな表情のおまけ付きでそんな事を言ってくる。
私に対しては完全に敵意ありって感じ？
改めて男の容姿を確認してみるけど、非常に整ってる。私をここまで連れてきた兄ちゃんは線の細い、ファンタジー風に言うと魔導師っぽい感じ。で、目の前の男は騎士とかそんな感じかな。
黒髪のショートなんだけど、一定の長さじゃなくてバラバラ。前髪は上げてあるのか、額は出ているんだけど少しだけ髪が下に落ちていて、それがよく似合ってる。まぁ、髪全体がたってるというかなんというか。ワイルドショートってヤツなのかな？
切れ長の瞳も黒、日本人を見慣れた私にとったら黒は日常の色のはずなんだけど、それよりも暗い、純粋な黒という感じがする。
そして、私が見上げる程だからコイツも高いね。
均整の取れたナイスなボディーはさぞかし女性を虜にするだろう。
まぁ、興味がないんで、一般女性ならうっとりする様な視線を投げかけるかもだけど、私は遠慮なく睨み返しておく。
ちなみに、私は人攫いにあった被害者よ？

すると男は驚いたように、目を瞬いた。
コイツも、セクハラ兄ちゃんと同種か？
女は甘い顔でもすると思ったか？

おかしくて笑ったら、今度は怪訝な顔をされた。

いやいや、貴方を笑ったんだよ？　そんな視線を向けたら、なんともいえない表情を浮かべるけど、そんなもんは知ったこっちゃございません。

「眞王様」

すると、唐突に変態1の兄ちゃんが話し出した。
ちなみに現時点で私の中では、黒の色彩が素晴らしい程輝いている騎士系兄ちゃんは変態2の扱いになっている。

「こちらは覇王様。我ら眞族を束ねる者で、眞族の中で一番強い者が覇王を名乗ります」

「束ねる？」

それって眞王の仕事じゃないの？？

疑問を投げかけたら、変態1は頷き、説明を続けた。

「えぇ。眞王様は眞族の唯一の王です。覇王様はそうですね。ただの中間管理職ですね」

「あぁ…それでか」

だからあんなに言葉を言ったのか。
そりゃ今更上司が登場したら嫌だよねぇ。ごめんね。所詮私は自営業だからさ、そんな苦労は全然知らないんだけど、話しぐらいは聞いてるよ。

「眞族で最強って言っても、眞王が登場したら中間管理職…か。睨みたい気持ちはわからなくもないけどさ、私自身連れ去られたんだよねぇ。誘拐犯の一味が被害者に対してそれはちょっと失礼なんじゃない？」

売られた喧嘩は買いますよー。
んでもって、利子つけて返却だよねぇ。

「さっそく仲良くなられたようで良かったです。眞王様と覇王様が仲たがいすると、揺れますので」

相変わらずイケメンだけとワケの分からん事を変態が言う。
何処を如何見たら仲が良くなったように見える？？

「仲良く見えるんだ。相変わらず節穴だね」

そう言って変態兄ちゃんを睨もうとして、私はある事に気付いた。

あれ？？

見上げた身長差がおかしい。さっきは目線の先に顎辺りが近くに見えてたんだけど、今は鎖骨が見えやすくなってる。

「ちょっと鏡貸して！　なんか身長が縮んでる！」

勘弁してくれと珍しく叫びたいさぁ。
だってさー。２０歳になる頃牛乳飲んでカルシウム食べて通販グッズにまで手を出して伸ばした身長。
さっき確認した変態１の兄ちゃんは１８５ｃｍ程。さっき見えた場所と今の差を確認してみると――…１６７ｃｍ程？　それって１９歳の頃の身長ぐらいで、１７０ｃｍ越えたくて必死に、必死にね……

打ちひしがれている私に、覇王が意地の悪い笑みを浮かべたかと思うと、

「肉体を精神に合わせたんだろう。その方が安定して力を使える」

「つまりそれって私の精神年齢が１９って事かーー！？」

一瞬で距離を詰めて、襟元を両手で握り締めて覇王をガクガクと揺らす。
からかったんだろうけどね。
ちょっと切れちゃった。

「２８歳の自立した人間になんたる暴言！　自営業で柵なくのんびりやってるから逆に育ってないのか！？」

寧ろぽにくった私。
腕を動かしてたら長い白い髪が乱れて纏わりついてきた。

「邪魔っ。切るもの貸して！」

ええい。この際切ってやる。ばっさりばっさり久しぶりにショートにしてやる。

決意した私の腕を、覇王はあっさりと抑えつけて私をジッと見てきた。

「女か…？」

恐る恐ると言った感じに聞いてくる覇王に、私は気が削がれて少し冷静さを取り戻せた。

まぁ、切れる程の事じゃないんだけどさ。精神年齢１９歳ってさー。

「生物学上は女だけど、切るもの貸して？　この髪切っちゃう。邪魔だし」

白く輝く私の髪。

まるで覇王と対のようだと思ったけど、言うのは止めておく。

覇王の色彩が漆黒という事は、ひょっとして私は髪所か瞳の色でさえ白なんだろうか。白…より白磁っぽい。

「女か…騒がしい女だな。男にしか見えなかった」

「凛々しい顔立ちでしょ？　商売繁盛ありがとうって感じで鋏貸して？」

「切るな。尚更女に見えなくなる」

別に見えなくていいんだけど？
そう思った私は覇王に言ってみたけど、それは聞き届けてはもらえなかった。

あぁ、フェミニストってヤツ？
性別が分かった途端態度が緩和して、逆に面白くなくて私は深い溜息を落とす。

そういえば…まだ自己紹介していないよね。
覇王と眞王と変態で通じるから支障はないんだけどさ。

でも名前は必要だろうと思った私は、嫌だけど変態兄ちゃんに自己紹介を提案してみる事にした。

なんとなく、長い付き合いになりそうだ――と思うのは何故だろう。

全然気のせいでいいんだけどさー。

素敵に笑う二人に腹がたったので、とりあえずいつでも例の場所を狙えるように準備はしておく事に決めた。

変態１のイケメン兄ちゃんの顔色が変わったのはいうまでもない。

2話・眞王の力

「とり合えず自己紹介しよっか」

変態兄ちゃんその1を怖がらせるような物騒な視線をやめ、極めて笑顔でそんな事を言ってみた。

そう。非常に友好的な笑み。胡散臭い、なんて事は本人が一番思うのだが、やっぱり覇王の方は怪訝そうに眉根を顰めてこっちを見てる。

「じゃー私から。一之宮琉依架（イチノミヤルイカ）２８歳。こうみえて生物学上は女ね。で、そっちは？」

とり合えず変態1の方から、と思った私は視線をそっちに向けてみる。

「私はルヴァルア・サラーナ・ディスカシィラと申します。性別は男。年齢はそうですね。先月３２５歳になりました」

…うん。ちょっと桁が違うよね。寧ろかーなーりー年寄りっつーかなんというか。

恐る恐る覇王の方を見てみると、なんともいえない表情を向けられた。

「１００代目覇王だ。アルヴァ・カーズライド・ディカルラ。性別は見てわかるだろう。年は…１８０だ」

変態１の年を聞いた後だと、覇王が若造に見えるのはなんでだろう。どっちにしても、私より１００歳以上年上なんだけどね。

「覇王って眞王に比べて代替わりが早いの？」

まぁ。１０代目眞王と１００代目覇王なんだから、代替わりは早いんだろうけど。

「早いですよ。覇王になれるのは、眞族の中で一番力のある存在ですから」

変態１…つまりルヴァルア――うん。名前が舌噛みそう。今度からルヴァって言うか。面倒だし。

そう決めた私は、覇王の名前も省略してみる。アルって言いやすいよね。

「一番から落ちた瞬間、覇王じゃなくなるんだ。結構厳しい？」

性格とかは関係ないのかな、なんていう疑問から発生した言葉だったんだけど、ルヴァは迷う事無く頷いて見せた。

「えぇ。実力重視です。無能だと束ねられませんからね」

「ふぅん」

なんて興味はまったくございません！　という雰囲気を漂わせてみたけれど、ルヴァは結構言うタイプだねぇ、って思う。

アルがいつから覇王をやってるかなんて知らないけど、大変なん

だ。なんて思ったらつい不憫なって視線を向けてしまう。条件反射だから仕方ないでしょ？　睨まない睨まな～い。
どうやら同情されるのは好みではないらしいアル。その辺りはとっても同感なんだけどねー。
私の変わらない表情に飽きたのか。アルは私から視線を外して、遠くを見てた。その横顔から感じる感情といえば、早く帰れって事かな？？

まぁ、ここは気分を入れ替えて。
ちゃんと自己紹介もしたし、相手の名前も覚えた。
つまり、出会いの基本は済ませたわけで…

「じゃ、ルヴァとアル。早く帰りたいから帰してくれない？」

済ませたならもう用はない。
注文された物も早く作らなきゃならないし、それに納期的にもそれ程余裕はなかったはず。私は気味が悪いほどの満面の笑みを崩さずに、２人へと話しかけた。
寧ろ早く家に帰らせろ！　っていうのは私の本音ね。

「眞王様…貴方様は、この城の主です」

ビックリしすぎて、名前に突っ込みはないらしい。ちぇ。つまんないの。

「私のお城は別の場所。つまり地球って事ね。自分で商売して働いてローン返済の真っ最中。こんな所で遊んでる暇はないわけよ。わかる？」

ルヴァの言葉なんて、軽く流してまう私。

だって、私が望んだわけじゃないしね。
長い付き合いになりそうだとは思うけど、自己主張はちゃんとしておかなきゃ。

「あぁ。仕事ですが。つまりは時間ですよね？　なら大丈夫ですよ」

あれ？？　強張ったルヴァの表情から緊張が消えた。どうしてだろう。

「この世界は、眞王様が誕生された星とは別の時間軸にあります。眞王様がこの世界で自身の力を使いこなせるようになれば、自由に行き来が出来ますよ」

「へぇ」
つまり、私は自力で帰れって事ね。
ある意味シンプルで分かりやすいね。

そういうのは、正直嫌いじゃない。

「じゃあ、講師とかつけてくれるんでしょ？　眞王がどんな力を使うか知らないけどさ」

開き直れって事ね――と解釈した私は、友好的な笑顔を止めていつも通りの笑みにかえる。
友人曰く。清清しいまでに何かを企んだ含みのある笑顔。だって。
あー。でもアルはこっちの方がいいみたい。
ちゃんと、こっちを見たしね。ルヴァは相変わらず変だから放置でいいんだけど……ウットリと見られてるのがなんていうか…微妙。
今の会話の何処にウットリ要素があった？？

「とり合えず…ルヴァは邪魔。説明はアルだけでいい」
私がその言葉を言った瞬間、ルヴァはこの場から消えた。始めから存在していなかったかのように、忽然と。

「消えたー」

流石人外。なんて手をぱちぱちさせてみた。

「外だ。お前が転移させたんだろう。出鱈目な方法でな」

何処行ったんだろうってキョロキョロ見る私に、アルの説明が入る。なんだかんだいって面倒見がいいんだ。これはぜひとも付け入らねば。

「そうなんだ。出鱈目って？」

そこは抑えておきたいポイントだよね。
聞くまで離れる気はありません！　とばかりにマントを掴んだら、やっぱりアルは何処か諦め気味。ルヴァのキャラが濃いから疲れたかな。
アルはチラッと私を見た後、右腕をゆっくりと前へと突き出した。

「アルヴァが命ずる――焔よ。踊れ」

アルが言うと、焔の朱色が瞬く。本当に踊っているように。
へぇ。これは綺麗だね。
感心したような見惚れてるような、そんな眼差しを向けていると、アルは焔を霧散させた後、さっき私が言った言葉を口にする。

「ルヴァは邪魔。お前はこれで転移をさせた。

俺の場合は、アルヴァが命ずる――ルヴァルア。庭園に佇め。になる」

ちょっと短いかなって思うけど、そんなに変りがないような。

「わからないか…俺も短い方だ。そうだな。転移に必要な詠唱時間は標準3分程だ」

流石に、それを聞いたらわかった。

アルもだけど、私も反則的に短いね。

「…つまり、眞王としての力は使えるわけで、後はコントロールってわけか」

イメージは、言葉遊び。

どれぐらい力があるのかわからないから、結局はコントロールの練習をしなきゃならないんだけど、別にそういうのは嫌いじゃないからいっか。

独り言を呟く私に、アルは視線をさ迷わせてる。さっきの自信一杯の態度は何だったんだ??　っていう感じで、今は頼りなさげ。

あぁ。ガックンガクガクで毒気を抜かれたのかも。そういえばプチッと切れて揺らしたねぇ。

まぁ、試しに軽いのからいってみますか。

何にしようかなぁ、なんて辺りを見回し、ちょびっと埃がある事に気付いた。

こういうのって毎日掃除しててもでるんだよねー。

「ゴミ袋に埃が集まれば掃除が楽?」

イメージは１０枚５０円程で買える地域限定ゴミ袋１５リットル。
そこにもっさーと集まりゃ楽っていうかさ。

って思ってたら、私の前には濃い目の黄色のゴミ袋がちょこん、と置かれてる。除いてみると、城中の埃を集めたかな？って思える量がこんもりと入ってる。

おぉー。便利。
なんつーか言葉遊び以前って気がしなくもないけれど。

「ただの日常会話だな」

アルが遠慮なく思った言葉を口にする。
あはは。否定はしないよー。思ってたからさぁ。

「魔力で物質を精製したのか。知らないくせに器用だな」

「知らないから出来ちゃったんじゃない？　あ、本能一直線の桃頭じゃないからね？　一応理論派で通ってるから」

そう。一応考える子だよ。
感や本能で動く事も否定はしないけどねー。

「桃…か。真中にぐるっと線が通ってるな。まぁ、いい。アルヴァが命ずる――消滅しろ」

アルが言うと、私の目の前にあった黄色のごみ袋は一瞬で消滅した。

「おー。消えた。やっぱ便利だね。掃除が楽ー」

地球に帰ったらぜひとも活用しよう。

アルからは掃除じゃないだろ、と言わんばかりの冷ややかな表情が向けられてるけど、気にしない気にしない。

だって、便利だし。

誘拐されて心身ともに疲れ果てさせられてるんだから、慰謝料貰わなくちゃねぇ。

と、黒い笑みを浮かべる私を何時の間にか戻ってきたルヴァが、柱の影からウットリ見てたのね。

だから、何故そこでウットリ？？

わからなくてアルの方を勢い良く見てみたら、視線を逸らされた。

あぁ…うん。やっぱ、同族でも変態には関わり合いになりたくないのね。

すっごく同感。

というわけで、引き取ってもらえないかな？

あの変態。

結局、私の意見が受理される事はなく、変態は見事私の教育係りになるらしい。

権力がある変態。

心底性質が悪いと思うのは絶対、私だけじゃないだろう。

3話・力の使い方

かっこいい呪文。に、ちょっと憧れる。

が、現実は遥かに厳しく、かっこいい呪文への頂は遥かに遠く…。

「とり合えず変態はお家へ帰って」

なんてルヴァを見ずに言ったら、遠慮なく力が発動された。ただ、言っただけの言葉なのに力が宿って発動された魔法。

いや、まぁ、邪魔だったから帰っちゃって問題ないんだけどさー。なんていうか体内に宿る魔力が迸るだけならまだしも、だだ漏れってさぁ。ちょーと情けないかなぁ、なんて思ったりね。

「お前の日常会話呪文は何とかならないのか？」

アルにまで言われる日々。

自覚はしてるんだよ？

すっごくしてますともー。

「ごめーんね」

って首を傾げて可愛く言ったら、思いっきり眉間に皺を寄せられ

た。相変わらず失礼なヤツだなぁ、なんて溜息をついたら、突然アルの身体が巨大な物体に押し付けられたかのように絨毯と仲良くなった。

あれ??

「アルヴァが命ずる――解放されろ」

どうやら押し付けられただけで、話す分には何の問題もないらしいアルは、自分で私が放ったらしい魔法を解除してた。

らしいって言っちゃうのは仕方ない。だって、自覚ないし。と、開き直ってみせる私に、アルの視線はあくまでも冷ややかなモノ。

「だから、そのだだ漏れな魔力を何とかしろと言っているだろうッ！」

一気に立ち上がったかと思うと、少し離れていた距離を一瞬で零にしたアルが私の胸倉を掴みかからんばかりの勢いで詰め寄る。

ここで、唾が飛ぶ、なんて言ったらもっと怒られそう。

「聞いてるのか？」

嫌がらせのように低音ボイスで囁くアル。

低音ボイスは耳にとっても優しくないと思うのは気のせいかなぁ？

気のせいじゃないよねぇ？

というわけで、最近定番になった方法で脱出を試みる。

まず始めに自分の腕をアルへと回し、ギュッとした後に地面を力いっぱい蹴る。すると私の体勢が崩れるから、アルが私の背中に腕を回すように助けてくれる。

で、私は優しく腕にキャッチされた後、絨毯の上を転がるようにアルの元から戦線離脱。結構所かかなり情けない方法だけど、何故か効果があるのが不思議だったりするんだけどね。

「お前は……それ以外に脱出方法は思いつかないのか？　何故日常呪文をここで使わない？　ただただ漏れなだけか？？」

あー。やっぱ尚更怒った。

毎回効果のあるコレだけど、やると必ず火に油を注ぐかのようにアルの着火点に火をつける。

でもやっちゃうけどねー。

「だって、まだ意識して使うのは怖いしさ」

どうせならかっこいい方がいいし。というのは私の本心だったりするわけで。

「反省はしてるんだけどね。未だに魔力が見えないのが原因だったりするのかな？」

そんな私の言葉に、

「……………………………………………………………………………」

アルは無言を貫き通してた。

寧ろその表情は驚愕っていう感じで、思わず何で？って首を傾げてしまう。

そんなに驚く事言った？？

「ちょっと待て。魔力が見えないって何時からだ！？」

何時からも何もさー。

「始めッからだよ？」

何当たり前の事言っちゃってるのかな？

地球に魔力、なんてモノは存在していないわけで。ソンナモノが日常的に見えるわけがないでしょ？

と、至極当然とばかりに言ってのければ、アルは顎に指先をつけ、顔を伏せた状態で考え込むように押し黙る。

「……」

「なんで考え込んでるの？　意味がまったくわからないんですけど、教えてくれちゃったりはしないのかな？」

寧ろアルの無言がキツイです。

２人の間の沈黙には慣れません。

だって、この数週間賑やかだったし。

「先日の焔は…」

「あれはアルが具現してくれたでしょ？　肉眼仕様だったと思うよー」

「へ…ルヴァへの転移は？」

「消えたようにしか見えないけど違うの？」

今さぁ、変態って言いかけたよね？
気付いたけど、あえてスルーをしておこうかな。からかうのは面白いけど、アルのこの反応は気になるから解明したいし。

「アルヴァが命ずる――纏え」

すると、やっぱりアルはなんの説明もないまま力を使う。
纏えって…魔力を纏ったりしてるのかな？って目を凝らして見てるけど、やっぱりわからない。

うーむ。
生まれて初めての経験でよくワカラナイや。
出来ない事ってなかったし。

「俺の力は黒だ。見えないか？」

面倒見が良いと思ってつけ込んだアルは、やっぱり面倒見が良くて。
こんな風に怒りながらも気遣う眼差しを向けてくれる。

「（でも…男だったらこうな風にはならなかったと思うなぁ）」

と思うのは、ここ数週間の付き合いより。
女の子にもてそうで、実際もてまくるアルだけど、付き合った事のある人数は片手で足りちゃうんだって。ルヴァ情報だけど、信憑性はあるらしい。
信憑性があるのも怖いけど。
調べたんだって感じでね。
私の事は調べないでよねーって釘は刺したけど、その後の言葉の

方がなんとなく嫌で、この件については深く考えないように決めたんだっけか。

眞王様の事は直接触れ合って分かり合うから大丈夫ですよ。

それに……私一人で十分です。

と、満面の笑みで。

触れ合う気もないからとり合えず庭に放り投げておいたけど。

あ…視線。

どうやら聞かれた言葉には答えず、考え込んでる私にアルの視線が遠慮なく注がれる。

「黒色も何も、風景か一面真っ白でよく分からない」

そうなんだよねぇ。

いつもの風景に、時々霞がかかったかのように真っ白になる瞬間がある。地球に帰ったら眼科かなぁ、と思ってはいるんだけどね。

何時頃帰れるかはわからないんだよなぁ。

けれどアルにはそれで十分だったのか、やっぱり驚いたような表情を浮かべた後に突如肩を震わせて笑い出した。

はい？

なんで笑っちゃってるの??

意味がわからず柄にも無く立ち尽くしていると、やっぱり突然アルに肩を掴まれた。こういうプチ接触がホント多いよね。ここの人たちって。

「一面真っ白？」

アルの、珍しくも無く真面目な表情。

「霞がかかった感じ？　よく分からないけど」

とりあえず真面目に答えとく。

それに、私の危険センサーがコレは真面目に答えろって警報を鳴らしてるしね。

「そうか。一面真っ白か。霞か。それ以外は風景か」

私の言った言葉を繰り返すアル。

一体何がどうなってるのか意味がわからない…けど、おとなしく待っておこう。

「眞王」

おとなしく待ってたら変態2が復活したのか、人の耳元で囁くように私の事を呼ぶ。この低音ボイスは結構――ううん。かなりくすぐったいよね。

「ソレがお前の魔力だ」

反撃に出る直前、アルから言われた言葉に私の足はその動きを止めた。

それが魔力って……霞が??

「お前の魔力に覆われて、他の魔力が見えなかっただけだ」

「見えなかっただけって……見えないもんなの??」
だってアルに纏わり着いてる魔力ぐらい見えるんじゃないの?
そんな私の疑問は、あっさりと切り捨てられた。
「お前の魔力に比べたら、俺の魔力なんて塵芥に等しいんだろうな。眞族最強と言われる覇王の俺が…な」
ちょっとへこんでる感じのアルに、私はというと肩に置かれた手を振り払い。
「へこむならルヴァの所でどーぞ」
ある意味容赦のない一言を、当たり前のようにアルへと向ける。
やっぱり女にそんな事を言われた事がないのか、アルの反応は一瞬驚いたような表情を浮かべた後、肩を竦めて見せた。
「相変わらず、眞王は冷たいな」
たらしっぽい甘いマスクっていうの? これ??
私にはまったく効果がないって分かってるのに、よく浮かべるね。なんて笑って見せると、いつもの表情に戻った。
うん。眉間に皺を寄せてるほうがいいよ。
こっちの方がアルっぽい。
「冷たいっていうなら、そうだなぁ。私の名前を呼んだら考えてあげる」
ほんのちょびっとだけ優しくね。
自分的にはにんまりと。

でも、きっとアルの目には別の表情が写ってたんだと思う。
息を呑むような音が響き、その場が少しだけ、沈黙に支配されたから。

どうやらアルは、時々見せる私の真剣？な表情に弱いらしい。
メモメモ、って内心考えてると、その瞬間あるもいつも通りに戻る。

「相変わらず、碌な事を考えないな」

ぴくぴくと眉根が動いてるかもしれないアルを横目に、私はさっさと戦線離脱を試みる。
この状態からお互い力を放って部屋を壊滅させたのは、まだ記憶に新しい。流石にそれは怒られるからね。逃げようかなぁ、なんて思ったら視界に白い靄のようなモノが飛び込んできた。

あー。これが、私の魔力だっけ？

じゃぁ、この魔力を少しだけ動かして、アルの動きを止めて？

声音には出さず、心の中で念じる。

すると、白い霞は私の思うがままに動き、アルの動きを完全に止めた。

「…な…にをした？」

震える声。
あらら。折角の色男が台無しよ？
「お前の、力だろう？」
「そうみたい。ちょっと心の中でアルを止めてってお願いしてみた」
そう。ささやかなお願いだと思う。
「ははっ…声に出さずにか。規格外過ぎるな…」
流石の覇王様も脱力気味。
やっぱり相当の規格外らしい１０代目眞王である私の力。
他に何が出来るかなぁ、って興味はあるけれど、今はアルの束縛を解いておく。これで仲が悪くなっても悲しいし。

「今回は自分で解かなかったね」
解いた後、興味本位で聞いてみた。
すると、返ってきた言葉は意外なもので、私はついアルの顔を凝視してた。
「魔力まで束縛されてたら、解けないだろうな」
そんな事まで出来るんだ？　とは、聞かなかった。
流石に出来ないと思うし。

アルの反応から察するに、だけどね。
「へぇ。自分で言うのもなんだけど、相当規格外過ぎるんだ」
面白いなぁ、なんて思ったら声が弾んでた。
「…お前が、普通の女じゃなくて良かったな」
何処か呆れたようなアルの声。
「普通ってなぁに？」
寧ろこの容姿からして普通の女の子規準からは外れてるしなぁ。
今更じゃない？
「いや。それでこそルヴァに付き合えるんだろうな」
「は？　いや、それはちょっと違くないかな？？」
いやいやいやいやいや。
それは話しが違うんじゃないの？
変態さんは私もごめんなんだけどさー。
「アルさーん？　なぁに笑ってるのかなぁ？？」
私に背を向け、これ見よがしに肩を震わせるアルに、今度は私の眉間に皺が寄る。
「笑うならせめて顔を見せようよ。ね？」

私が幾ら凄んでみても、やっぱりアルは肩を震わせて笑うだけ。

「あーるぅぅぅう」

イメージは背後からのうらめしや～。

けれど私の手がアルに触れる瞬間、アルの姿が掻き消えた。

始めから、その場には私しかいなかったかのように、余韻さえ残さずに。

「逃げられた…なんか屈辱だよなぁ」

結構悔しい、なんて本音は口にしないけれど。

せめて本来の姿だったらもうちょっと迫力があったのかなぁ。

と、思わずにはいられない。

4話・手紙

清清しい朝の陽射し。
悠宴も地球もそれはかわらず、私は朝日と共に目覚め行動を開始する。
取りあえずは背伸びをしたりしながらベットから足をおろし、顔を洗ったら軽めの運動。その後はシャワーを浴びて、メイドさんが用意してくれた朝食を食べながらルヴァから今日の予定を聞いたりするんだけどね。

「…何それ??」

その日は、いつもとはちょっと違った内容だったわけよ。
普段は口頭で伝えられる私宛の手紙の内容。
親しい眞がいるわけじゃないから、勝手に開けられた所で精神的抵抗はまったくなしだからいいんだけどさ。
この日に限り、何故か口頭プラス手紙を渡されてね。文字の勉強はしてたし、眞王になったおかげっていうのかな??　文字を読む分にはなんの問題もないぐらいの知識が勝手にあったから、ルヴァから渡された人間の王たちの手紙を最初っから最後まで読んでみた私はというと…。
思わず口に物をいれた状態であんぐりと開けるという間抜け面を晒してしまったのね。アルに冷ややかな眼差しを向けられた私は慌てたように口の中身を咀嚼したんだけど、それ程衝撃的な内容だったわけよ。
こんな間抜け面はもう人様にはお見せしたくはないけれど、手紙

の内容が衝撃的過ぎてその不覚を頭の隅っこに追いやりそうになりながら、辛うじてルヴァへと視線を投げかける。
勿論、シンプルに説明して？　と言わんばかりの視線をね。
「眞王様が降りる度ですから、人間からすると恒例行事のようなものでしょうが……はっきり言って寵愛が欲しいだけだと思いますよ」
歯に衣着せぬ物言いでズバッと言い切るルヴァ。
「まぁ。そうでしょうねぇ」
けれど、私はそれにあっさりと同意の言葉を返した。
ぶっちゃけ、内容は求婚。
一つの机に向かい合って書いたんじゃなかろうか、と思えるほど一文字一句違わない内容の手紙は、差出人と文字の書き方が違うだけ。
「会った事もない眞王によく求愛の手紙なんて出せるよねぇ。で、恒例行事になったっていう経緯は？？」
慣れ親しんだ行事だかなんだか知らないけど、どういう経緯でそんな面白い事になったのか。
「8代目眞王様でしょうか。彼女が人に加護を与えた事から始まったみたいですね」
気まぐれに。
なんて言葉を付け足すルヴァの表情は間違いなく、嘲り。
そこまで嫌いか人が？？と思ったけど、今は声には出さずにひっそりと胸に留めておく。機会があったら聞くけどね。

態々こんな事でルヴァとの会話を増やすのもなぁ、なんて思っちゃうし。
けれど八代目って、つい最近じゃないのかなぁ。なんて思ったけど、多分恒例行事っていうぐらいだから、定期的に送りつけてたんだろうなと思う事にして納得しておく。

「つまり、眞王の寵愛――つまりは加護を得られたら、人は楽なのかな？　何もしなくても繁栄も栄華も極められそうだし、今は三国が丁度良くバランスを保っているみたいだけど、眞王の介入でそれが崩れるんじゃないの？」

寧ろ、それ希望？
私の問いにはルヴァじゃなくて、アルが答えてくれた。

「そうだろうな。人間にとって俺たち眞族は化け物だ。それの寵愛を得たいって事は、下心ありだろう。人間は欲深いし…な」

「へぇ」

どうやらこのネタは2眞にとっては鬼門みたい。
いつもより表情は優れないし歯切れは悪いし。

「私も人間だけどねぇ。産まれた時から眞族の気持ちはまったくわからないけど――そうだな。人だから思うよ。
んな下心でプロポーズなんかするな馬鹿野郎ってね」

はっはっは。と豪快に笑いたくなる感情を水面下で押し留めたまま私はにっこりと満面の笑みを浮かべる。
結婚相手ぐらい自分で決めますよ？

それと同様に好意を寄せる相手ぐらいは自分で選べるし。
まったく女心を理解出来ていない三人の王たちの手紙を、私は宙へと放り投げた後、
「重苦しい手紙だからなぁ…せめて羽ばたきのある軽やかな鳥にでも変わって私の役にたってみよっか」
日常会話呪文を発動させてみる。
これが、私から三人の王たちへの返事。
鳥たちは三人の王の色彩を形取っているのか、見事に違う色の羽を羽ばたかせてる。こうやって見ると綺麗なんだけどねー。
内容はなぁ。
他力本願はうざいよねってにこやかに言葉を返したくなるんだよねぇ。
「眞王様…それが、返事ですか??」
「ん。そうだよ。綺麗でしょ」
頷く私に、ルヴァは表情を崩した。どちらかというと珍しくしかめっ面っていう感じ。
「眞王様の力を使うなんて勿体無い。それぐらいならば私が行きます」
何やら腹に一物程抱え込んでそうなルヴァの言葉に、私は両手を使って大きなバツ印を作る。
「ルヴァの場合は何かやっちゃいそうだからダメ。
こういうのは私も好きじゃないけど、どうせなら穏便に断りたい

ね」

寧ろ、口々に私の本音を暴露する鳥たちを向かわせて、穏便に済むとも思えないんだけどね。

「それで穏便に済むのか？」

やっぱりアルからの突込みがはいったけど、私はさぁ。と肩を竦めてみせた。

「怒り浸透かな。ま、それでいいんじゃない？　顔も知らない私にプロポーズして、しかも内容は下心ありありの癖して綺麗な言葉で纏めようとする根性にはぜひとも喧嘩売りたいし」

あぁ。でも私も三人を知らないけどね。

別にこれを見た後だと興味の対象にすらならないんだけどさ。

「それに、名前すら書いてないでしょ？

恒例行事でただ出しただけって感じもするよね」

三人の王たちの名前はわからない。

だって書いてないし。

ただ、なんて呼ばれているかだけはわかったけどね。手紙の最後には名称で書いてあったから。

「眞族に名を呼ばれると正気を失う――という噂があるみたいだな」

面倒見の良いアルからの言葉に、へぇ、なんて間抜けな声を返してた。

「そんなに怖いなら関わらなきゃいいのに。7代目が居住スペースが被らないようにわけたのに、何で突っ込んできて怖がってるの？」

私の素朴な疑問に、2眞はさぁ。と不思議そうに首を傾げるだけ。この辺りの感覚は、眞族の2眞には理解出来ないみたい。とはいっても、私も不思議なんだけどねー。

まぁ、この辺りは性格かなぁ、って思う。正直ね。

「とりあえず、小鳥たちは伝えてね。それで10代目と人の関わりは終了にしておこっか。面倒だし。地球以外で人と関わり合いになりたくなんかないし」

そう。

とりあえずこれで終わりだと思うんだよね。

だって、ただ言ってみただけの寵愛希望なんて、相手にもされなきゃその時点で終わりでしょ。

「ごちそうさま。じゃ、私は図書館に行ってくるから」

日々勉強中の私は、日参してる図書館へと向かう為に勉強道具をいれてある鞄を肩に掛けてから出発した。

この件についてはアルもルヴァも頑張れっていう感じらしく、割と好意的に見送ってくれてる。それにしても、今日の朝食の空気は気まずかったと、光景を思い出した私は腕を撫でながらぽてぽてと歩いていく。

日光浴やら散歩やらを兼ね備えている図書館までの道のりは、割とのんびりと寛ぎながらね。

ちなみに、覇王であるアルが眞族についての日々の業務はやって

くれちゃってるから、特に仕事もないんだよねぇ。眞王ってホント自由。
けれど、この取り決めも七代目辺りから、みたいでね。
どちらかというと私は七代目に興味が沸いちゃってるんだよねぇ。だって、絶対日本人だよ？　しかも私と同世代だと思うし。
どうやら悠宴と地球は本当に時間軸が違うみたいで、極端な話し、私と同世代が２０代目眞王になる可能性もあるみたい。
んでもって、図書館で調べる事といえば興味の対象である七代目眞王と、折角だから三人の王たちについて。
ぱらぱら、と文字を追いながらページを捲っていくと、王たちの名称も眞王や覇王と同じく受け継がれているだけって事がよくわかる。

「へぇ。３人の王たちは一斉に代替わりするんだ」
しかも同じ年。
これは古くからの取り決めみたいで、大体は１８歳から４０歳辺りまで？
その中でも例外はあるらしくて、誰か一人でも病気になったり王を続けられなくなったら、その時点で他の国も王の退位と、新王の即位があるみたい。
勿論これも、七代目眞王の取り決めね。

気分はすっかりゲームの設定資料集に目を通す感じ。気になってる事があるからいいけど、そろそろ飽きるかなぁ、っていう本音は口には出さないでおく。

昨日から決めてあった冊数に目を通した後、肩を解す為に腕を頭

上へと上げた後に首を回してみる。
　こきこきと音が鳴るわけじゃないけど、気分的に凝った肩を解すように念入りに。

「んー。勉強終了ー。さってと、帰ってアルお勧めのご飯でも食べよっと」

　誰に言うわけでもなく独り言を叫んだ後、私は後ろに生まれた気配を無視して歩き始めた。
　突然生まれたソレは、私を伺うように一定の距離を保ったまま後ろをついてくる。

「（眞の気配じゃないよねぇ）」

　眞王だけあって、気配を読むという行為にまったく慣れていない私でさえわかるんだけどね。でもこのストーカーっぽいもの――…

　なんだろう？と、小首を傾げたくなるのを我慢しながら、気づかないふりを続ける。
　この星にきて初めて感じる気配に、面白くない、といえば嘘になる。寧ろ初物に興味津々だったが、無防備に応対すればルヴァとアルがきっとうざい。

「（どうしようかなぁ。対応すればウザイけど、連れてってもきっと何か言うよねぇ）」

　あの過保護な2眞の事だから。

「そうだなぁ。とりあえず悪戯が出来ないように動きを止めちゃって」

こんな時は役にたつ日常会話呪文に、内心複雑な感情を向けつつも感謝してしまう。だって、怪しまれずに力を使えちゃうわけだし。

私の力に拘束され動けなくなった塊に視線を落としながら、私は悠然と微笑んで見せた。

見た目が１９歳じゃ、いまいち迫力に欠けるんだけどね。

「何か用事？」

声を弾ませると同時に、笑みは崩さない。

塊は、何も答えなかった。ただ一言小さく、恐怖に頬を引きつらせながら“手紙”と紡いだ後は、地面に額をこする様に頭を下げているだけ。

どうもこういうふうに頭を下げられるのは抵抗があるんだけど、ここでそれを言っても仕方ない事だと諦めながら、私は丸まった塊の近くに膝をたてながら顔を覗き込んでみる。

可愛い女の子。でも、一人しかいないのに一人じゃない。

今表に出てるのは女の子だけど、中に男の子たちがいる。

「あ…」

唐突に3人という人数で思い立った私は立ち上がると、指を鳴らして三人を本来の形へと戻した。

一瞬苦しんだような気がするが、一つだった塊が三つに増えた頃には呼吸は収まり、恐ろしいものを見るように怯えながら私をみる

だけ。

「三王――智王、武王、賢王の関係者だよね？　何か御用かな？？」

――と、怯えているなんて一切考慮せず、疑問をそのまま音にして流す。

そろそろルヴァたちが探しにきちゃうから、さっさと白状して穏便に解散してほしいなぁ、って心底思ってるんだけどね。

どうやら穏便には済まないらしいみたいで、私は近づいてくるルヴァの気配に深い、深すぎるため息を落としていた。

本当に、過保護っていうか心配し過ぎというか。

「身の安全は保障されたいよね」

そう。

一応安全策で、丸まって塊になっている三人の防御を固めておく。

やっとかないと怖いしね。

そんな私の危機管理はまさしくその通りで、ルヴァが容赦なく降らせた力によって地面が抉れていく光景を眺めながら、三人の様子を伺ってみると、その表情は顔面蒼白。

お疲れ様ー。

他人事のように、その言葉を口には出さずに呟いてみるけど、やっぱりルヴァはやりすぎだよね。と思ったのは手放したくない感情（ココロ）だと思う。

寧ろ、クレーターが出来ているお気に入りの通路を視界に納め、
私はしっかりと心の中で誓っておく。
このお礼に、ルヴァの頭を一発は確実に殴ろうと。
そんな決意を固めるのだった。

5話・三王たちの集い（前書き）

※この話しは眞族側ではなく、三王たちの会話になります。

5話・三王たちの集い

化け物なんぞに、何故寵愛の手紙を書かなければならない！

と、叫んだのは誰だったのか。

「それは皆同じ気持ちですよ。が、寵愛を得られたなら、我々人間の世界はいっきに発展する。それは、眞王が持っている力だったり、知識だったりと」

そんな化け物に態々寵愛の手紙なんて書かなければならない心境は同情する。が、その可哀想な立場は自分も同じだとはっきりと告げると、一人の王が渋面を作り上げながら溜息を落とす。

「まったく…何故化け物と同じ星に暮らさねばならぬのか」

八代目眞王の時に、この星から追い出せば良かったのに。

と、一人の王が溜息を混じらせながら言葉を吐き出す。

見るに耐えない化け物如きに頼らねばならぬとは。と口々に叫ぶ王たちの元を訪れたのは、見た事もないような綺麗な色彩を持った

羽のある生物だった。
思わず3人同時に身体の動きを止め、魅入ってしまう。
だが、その見た事もない美しい生物から紡がれる言葉は何処ぞのならず者なのかと思われる音が吐き出された。

恒例行事で求婚なんて馬鹿ですか人様舐めてます？
しかも写しただけのような手紙なんて手を抜いてるのばればれでしょう。
脳みそ足りてます？
人の世の発展なんぞ自分たちでやればいいでしょ。
態々人を巻き込まないでさっさとその少なそうな舐めきった脳みそ働かせてよ馬鹿らしい。

まぁ、長々と話しちゃったけど。

そんなくだらない理由で人に求婚なんぞするな。

という言葉を最後に、十代目眞王と遊宴の人の関わりは一切絶ちたいと思います。

寧ろ関わり合いになんてなりたくないから、こっちの領域には足を踏み入れないように。面倒だから。

じゃ、勝手に繁栄はすればいいんじゃない？　人が頑張って人の手でね。

男か、女か、性別すらわからないこの状況の中。
これが眞王からの返事だと理解できたのは、鳥がその名を出したからだろう。でなければこれが眞王からの手紙だと、決して理解はしなかった。

寵愛さえ得られれば相手の性別など関係ないとばかりに、決められた文面の文を送った。
興味をもたれたら儲けモノだとばかりに。

だが、これから感じるモノは、呆れと拒絶。

それだけだった。

「なんだ…これは？」

武王が震える身体を奮い起こし、言葉を紡ぐ。

たったこれだけの伝言を受け取るだけなのに、人智を超えた存在の覇気に体力をごっそりともっていかれ、その場で倒れなかった自分たちを褒めたい心境にかられている。

「十代目眞王……か」

賢王が椅子にその背をもたれ掛からせ、息を吐き出すと同時に掠れた音を吐き出した。

「どうやら、私たちの恒例行事に、腹をたてたようですね」

智王が、机に身を預けながらもなんとか言葉を紡ぐ。

智王はその智によって国を統べる存在故に、他の二王に比べ体力面は劣る。が、一般的以上ではある為、もしここに一般人がいたら昏倒しているだろう。

眞王の力の片鱗を受けただけで。

「だが…これは本当に片鱗か？」

「…それは、私も思います」

「片鱗にも満たない、欠片だったらどうする？」

気に食わないと手紙の返事が返ってきた事だけは理解できた。

が、例え見た事もないような綺麗な色彩を持つ鳥であろうとも、これに眞力を注いだとも思えない。

「8代目9代目眞王は、我ら人の世が心血を注げば何とか、渡り合

えたはずだ」

武王が代々引き継がれている知識を参考に言うが、それに智王が首を振って答えた。

「この感じる魔力は、8代目9代目とは違うと思います。どちらかというと、この星の始祖である7代目を連想させる」

武王や賢王より魔力に優れた代々の智王。

眞王の遺いから感じる欠片程の眞力は、今まで感じた事がない程純度の高い純正な力。

知らず知らずのうちに、背に汗が滲み出る。

それは恐怖なのか、それとも今まで感じた事もない程の力に対しての歓喜なのか。

「（…賢王や武王には決して、わらかない感覚なのでしょうね）」

智王が司る力ゆえというべきか。

自身以上に純度の高い魔力に対しては畏怖を覚えると同時に、尊敬、崇拝といった念を自然に覚えてしまう。

それは恐らく、何十代か前の智王が七代目眞王に感じた心と類似していると、智王は内心呟く。

武ではなく智に偏った知識継承をする智王は、他の二王に比べ受け継ぐ知識の質は濃く、詳細は薄れにくく長い間引き継がれる。

その知識の中で、七代目眞王の事だけはしっかりと鍵がされ、薄れないように厳重に保管されるように引き継がれてきた。

つまり、智王に関しては眞王が化け物ではないと言う事を知っている。

が、ソレを他の二王に態々伝える気などなかった。

何故、どうして、など、疑問を持つ存在は多いだろう。

だが、三王は決して仲睦ましい存在ではなく、こうあるべきだと定められているが故に、こうして行動を共にするだけの話し。

それも全て七代目眞王が定めた理の一つなのだが、智王を除いてそれを理解している者は人間たちの中では存在しない。

「武王、賢王。私は眞王に対して使者をたてようと思いますが、貴方方はどうされますか？」

心の中でそっと、様をつける事は忘れない。

「…ふむ。ご機嫌伺いというやつか。ならば俺の国でも一人たてよう」

「そうか。じゃぁ、俺の所もだな。三使者を一つとして送れば、幻視の森といえども巻き込まれる事はないだろう」

「時間制限はあるでしょうけどね。上級の加護はつけますが、もって半日と思って下さい」

智王が纏め、それぞれが使者をたてる為に各国へ繋がる転送陣に足を踏み入れる。

「（これの知識は七代目眞王様、というのは知らないんでしょうね）」

２人の王を見送り、最後に残された智王は声に出す事無く、自嘲の笑みを浮かべ自身も転送陣へと足を踏み入れる。

融合のベースは、魔力に長けた智王の部下が選ばれるだろう。ならば、眞王に失礼のないように国一番の存在を選ぼうと思いながら。

静かに、笑った。

6話・宣告

場所を移動した私と人界の王たちの使いと、ついて来ちゃったルヴァ。で、目の前には覇王のアル。

ある意味眞族の上位者に囲まれちゃった使いの三人は、息も絶え絶えって感じでちょっと可哀想かな、という眼差しで見てたら、何でかアルが私の前に仁王立ち。私に背は向けてるんで、私に対してじゃないんだろうけど何か怒ってるっぽい？

ふむ、と何となく考えてますよー。っていう感じで顎を手に持っていきながら首を左右へと傾げてみるけれど、アルの背中に隠れてるから誰も気付かない。

「あのさぁ、アル。ルヴァ。この三人って私に会いに来たんだよね？　何で二眞が対応しちゃってるのかな？」

私には対応させません的な空気がビシビシと背中から伝わってきてね。背中で語る男っていうのは同性から見たらちょっとかっこいいのかもしれないけど、私は言葉でハッキリと言いやがれ派なのよ。

それに私の話しだし。それなのに当事者をほっておいて覇王と教育係に対応任せるって微妙だよねぇ。しかも人間嫌いっぽいし。

「眞王様はまだ、人の思念に読む事に慣れておりません」

「は？」

「ルヴァの言う通りだ。まったく…俺たち眞族を何だと思ってる」

「ん？」

珍しく、二眞が意気投合しちゃってる。あれ？　何時の間にそん

なに仲良しさんになっちゃったのかなぁ。なんて思ったんだけど、その瞬間アルの背中が嫌そうな空気を醸し出したのね。
どうやら私の考えがなんとなーく分かっちゃって、仲良しじゃないっていう意思表示？　まぁ、うん。ごめんね？　変態と仲良しは嫌だよねぇ。私からしてみたらアルも時々その変態の仲間入りしちゃうけどねっ。

「眞王…お前は今の状況を解っているのか？」

アルの地を這うような声。既に王の使いの三人は震え上がる元気もない――けど、一人だけ、毛色の違うのが混ざってないかなぁ。それに二眞は気付いてないみたいだから、その辺りは私がフォローっていうか、前に出なきゃね。

「わかってるわかってる。多分ね。私の手紙を無視して、今度は配下を送り込んできたんでしょ？　この場合、人に舐められてるっていう気は勿論するよ。だってさ、私の代は関係を持たないっていったのに、私の庭に足を踏み入れたんだしねぇ」

あぁ。まだルヴァを殴ってない。唐突に思い出した私はとりあえずルヴァを手招きで呼んでから。

「怒りの鉄槌でも食らった後外に放置された後は庭を綺麗にしておいて」

あはは。反応出来ない程一刹那で全てが終わる。地球にいた頃はこんな実力行使はしなかったんだけど、ルヴァには出来ちゃうんだよねぇ。まぁ、いっか。多分怒りの鉄槌でべしゃっとやられた後は外へ放置。で、回復は早いっていうか早すぎるから、そろそろ復活して庭の掃除に入ったかな。

「眞王」

咎めるようなアルの声。こんな時だからルヴァは戦力に数えろと言わんばかりの声音。

「アール。貴方と私がいれば十分。それに、ちょっと話も聞いてみたいしね。お土産でも持って帰ってもらおうよ。じゃ、さっそく個人用の客室へ移動して」

最後の言葉で魔法が発動する。それぞれの部屋へと移動した三人。ほっんと日常会話呪文って便利。慣れると手放せないっていうかさ。かっこいい呪文に憧れてないわけじゃないんだけど……需要を考えると日常会話呪文かなぁ。

「気付いた？」

未だに不平不満な表情を浮かべているアルに、私は静かに問う。その言葉に怪訝な表情を浮かべながらも、私に真っ直ぐに視線をおろす。そうやって、私の目を見て話すアルは結構好きかな。

二眞には、既に情が移ってるしね。俺様と変態だけど。

「一人…何か違うのが混ざってた。あれは…智王の使者かな？」

「……」

「巧妙に隠してたけど。他の二人に合わせてたけど。あの眼の奥にあるのは、眞王への嫌悪や蔑みじゃなくて、畏怖、尊敬、敬愛…？」

そうそう。怖いけど尊敬してますーっていう感じ？　私の言葉にアルは改めて考え込むんだけど、ハァ、と深い溜息を吐き出した後に私の肩を掴んだ。そして私の体の向きを変えた後正面へと立たせ

る。

「何？」

「眞王。お前が元人間で、人間に甘いのはもう…知ってる」

「そうだね。元っていうか今でも人間だから。地球に帰る気満々だし」

「…まだそんな事を。いや、今はいい。早く人間を追い返すぞ。不快だ」

あれ？　何か色々と諦められた気がするのは何でだろうなぁ。

まぁ、取りあえずは解ったよ。うん。こんな１９歳なピッチピチな見た目だけど中身はそろそろ三十路だからね。外見がそのまま見た目に繋がる眞族のアルよりは老けているのよ。中身がね。

考えてどことなく虚しくなる気がする思考をぶった切った後、私は武王の使者の元へと足を運んだ。次は賢王。で、最後に智王。

「あのさぁ、話したい事があるんでしょ？　話さないの？」

と、アルを後ろにやって声をかけてみるんだけど、一切話さない武王と賢王からの使者。

そろそろズバッと話してくれないかな？　男でしょ？　アルからのさっさと追い出せ的な視線がズバズバと背中に突き刺さる身にもなってくれないかな。

けれど、私が結構簡単に流しちゃってるアルからの殺気に近い視線は、当然人界からの使いにも注がれていたらしくてね。私は既にそれが当たり前だったし、実力的には私の方が上だからあんまり気にならなかったんだけどさ。

使いには半端じゃないプレッシャーだったみたい。

結局喋れない二人を放置して、最後の智王の使者でその話を聞い

てね。思わずジィっとアルを見ちゃったけど。

「俺の眼差し程度で話せなくなる使者か。それでよく、俺より高位眞族である眞王に会いに来れたな」

ハッ、と鼻先で笑いましたよこの子。思わずアルの方を向いた私の後ろで、クスリ、と可愛らしい笑い声が聞こえた。

あれ？　今背を向けたのって智王の使いの女の子だったよね？？

「まったくもってその通りですわ。あの程度の使いしか用意できない王が我等の王と同等という事事態嘆かわしい」

後半は独り言っぽいけど……あれ？

あぁ。女は生まれながらにとかっていうけど、演技だったのね。それとも、混ざってたから他の二人に引っ張られたか。

どっちでもいっか。

「眞王様。私は智王が一の部下。ハルフィニィ・モネアと申します。このような乱暴な方法だったのにも関わらず、寛大な御心真にありがとうございます」

額を絨毯に擦り付ける勢いで頭を下げるハルちゃん。いやいやいや。女の子がそれ駄目ーって事でね。

「顔は上げてリラックスして椅子に腰掛けてみよっか」

駄目駄目。女の子が腰を冷やしちゃホント駄目。地球で培われた女の子は大事にしなきゃ駄目だという思考は健在で、私は暖かな飲み物を用意してハルちゃんとアルへと手渡す。

既に名前を省略してるっていうつっ込みはナシね。噛みそうなん

だって。ここの人たちの名前って。

「んー。美味。アルも飲んで。後ハルちゃんも飲んで身体温めなね。幻視の森は人にとっては有害だよ。体外に有害な物質を排出するお茶でもあるから、戻ったら少し熱が出るだろうけど気にしないでゆっくりと寝てて」

無言のアルとハルちゃんに対して私は一人優雅にお茶の時間を楽しむ。これはルヴァに頼んで地球から取り寄せてもらったお茶なのよ。それを眞用にアレンジしたりしたんだけど。

あぁ、ハルちゃんには人間用ね。七代目眞王の研究のおかげでその辺りに抜かりはないのよ。

「ハルちゃん…」

思わずお茶をジッと見つめながら呟くハルちゃん。アルは何とも言い難い神妙な顔をしてるのは何でかな？

「可愛いでしょ。ハルちゃん。そうそう、今日はね。それ飲んで国に帰って？　あの二人はそろそろ限界に達しそうだし邪魔だから、連れ帰ってね」

というか、ここで死なれたくないのよ。

折角毎日毎日私好みに手を加えている宮殿でさ、さっそく人死にってすっごくヤだよねぇ。まぁ、お薬飲ませて人界でも死なないようにするけど。

あぁ。何か言いたげなハルちゃん。他の二王とは違って、何か知ってそうな智王から話をしてくるようにって言われたんだろうね。

「私が送った手紙の返事の魔力の残りがきっと、私への手紙を届け

てくれると思うよ。誰にも気付かれずにね」

この時点で魔法発動。今頃、智王の近くには誰にも気付かれないように私の魔力の残りが漂っているはず。ハルちゃんが帰って報告する事によって、その存在は明確になる予定。

曖昧だけど仕方ない。だって、実際見てないしこの呪文の効果自体よく知らないし。

「眞王様…本当に、すいません」

リラックス効果という名の呪縛によって、ハルちゃんは結構くだけた話し方しか出来ないらしくてね。でも、私は満足げに頷く。

固い話し方って苦手。敬語とか謙譲語を使う環境にいなかったからよくわからないし。

この際アルの文句は後回し。だってアルって結構というかかなり口うるさいし。心配性だしね。今はおとなしくお茶を飲んでるアルを横目で確認しながら、そんな事を思ってみた。その瞬間、チラリ、と私を見るアルがこっわーって思うけど。

「謝らなくていいよ。ただ、あんまり武王や賢王とは関わり合いになりたくないなぁ。あの思考は思わず実力行使に出たくなるしね。それに私が下に見られるわけにはいかないからさぁ……これ以上ちょかいかけてくるなら、お引越ししてもらうかもね」

「――ッ」

ある意味、私からの宣告。元々七代目眞王の時には考えられていた案。だから、遊宴の人間たちの居住スペースと眞族の居住スペースの間に、あんな空間があるんだよね。

これにはアルも予想外だったらしく、驚いたように私を見てる。

「私はねぇ、眞族が大事なのよ。眞王の性かな？　無意味にね、大事なの。わかってくれるかな？」

白く輝く髪を煌かせ、私はハルちゃんへと微笑みかける。この時、息を飲んだハルちゃんやアルが何を考えていたかなんて、私は知らない。

知る必要もないけどね。

「お茶は飲んだね。じゃ、ばいばい」

ある程度強制でも仕方ない。だって、人界まで安全に送り届ける為にはそろそろ時間的に限界。ルヴァの作業が終わっちゃうし。

っていうか、視界を合わせて見て気付いたんだけど、所々私の像がたってんだけど。何やってんのかなあの変態はっ。

ぺたぺたと何かをこねて私の像を手作業で…って、手作業？　あの身体のラインとか私そのまんまなんだけどっ。

「眞王？　どうした？？」

表情を変えた私に、アルの心配そうな声音が響く。

「手ぇ、貸して。見せるから」

言葉で言いたくない私は、アルに映像を伝える事にしたのね。アルの手を取り、ルヴァの行動を見せた瞬間、アルは眉根を寄せて鼻に皺を刻んだ。相当機嫌の悪そうな表情。

私もアルも人界の使いの事はふっとんだよ。この瞬間見事にさ。

「あの変態は…」

どうにかしてって気持ちで私が呟くと、アルは何でか手を前に突き出して魔法体勢。

「アルヴァが命ずる――…」

で、無言。何を命じていいか固まったね。完全に。

そんなアルの肩にぽんっと手を置いた後にね。

「現場に向かおう。で、ストレス発散をしない？　一緒にさ」

神妙な表情で頷きながら言葉を紡ぐ私に、アルは思案するように一瞬だけ視線をさ迷わせるんだけど、さ迷わせた視線が私に戻ってきた時にはアルはいつも通りのアルだった。

「あぁ。そうだな。木っ端微塵にな」

物騒な声音を響かせて、アルは愛用の武器を左手に持って右手は私へと差し出す。ん？　何？？

「――チッ」

首を傾げる私に舌打ちをした後、アルは空いていた右手で私の手を取った後に転移に入った。あれ？　アルヴァが命ずるってやつは…と思ったけど、左手に持った武器が光を放ってたから何か関係があったりするのかな。

で。夕食前の準備運動とストレス発散を兼ねた私とアルの実力行使は、石像所か庭をほぼ壊滅状態にまで追い込んじゃって。しょうがないからアルとルヴァと私の魔法で元通りに直したよ。

いや、しょうがなくもないんだけどね。

あー、でも。

魔力を存分に使うのはストレス発散で良い感じだったのは、ちょっとした秘密だったりする。ばれたら、アルの手合わせの相手にされそうだしねぇ。

7話・対面

ふわぁ、と力いっぱい背筋を伸ばした後、購入したばかりの洋服に手を伸ばす。私が着るのはジーパンとシャツといったシンプルなモノ。

私が地球出身という事で、悠宴にも地球にあるような店が増えた。その辺りは眞王への配慮らしくてね。

心遣いは嬉しいんだけど、それを理由に地球に帰ろうとしていた私としては内心複雑だったりもする。

今日は、智王にこっそりと会いに行く日だったりするわけだけど、普段着のままでいっか。なんて思いながらあっさりと着替えを終わらせた。

多分、ルヴァに見られたらチクチクと言われそうな気もするんだけど、その辺りは黙らせればいいから問題なし。

面倒なのはアルだけど、人間に会うのにおめかしするの？　態々？なんて言えば問題は無いはずだし。今更だけど、眞族にホントーに慣れたっていうかね。アルやルヴァと一緒にいるのが当たり前になっちゃって言うか。

「あれ…そういえば」

そこでふと気付く。本当はもっと前に気付いててもいいんだけど、この環境に慣れるのに精一杯で気付かなかったという事にしておこう。

「ねぇ…アル。他の眞族に会ってないよね？　何で？？」

私の部屋の隅に産まれた気配。

相変わらずプライベートは全無視な環境。まぁ、私が拒絶すれば入ってこれないんだろうけど。

でも、これだから変態の称号を取り下げる事が出来ないんだけど

さ。
「まだ、中てられる」
「何に？」
律儀に答えてくれるアル。でも、言ってる事がよく分からないのもいつもの事。
「眞王の力に、だ。もう少し経てば眞王の力が星に馴染む。そうすれば会えるだろ」
「ふぅーん。眞族は駄目なんだ……智王は平気なの？」
眞族より人間の方が弱そうな感じがするんだけど。
「人間如きに魔力の真髄なんてわかるわけがないだろう」
「そうなんだ。つまり会っても平気って事ね」
壁に背を持たれかけさせて、腕組をしたまま不機嫌そうに眉間に皺を寄せてるアル。私の方をチラッとも見ない所から、相当機嫌が悪いってわかるんだけどねぇ。
「不機嫌そうな顔。癖になっちゃうよ？」
ゆっくりと歩きながら手を伸ばす。指先を伸ばした先にはアルの眉間。ここまで近づいて漸く私の方を見たんだけど、瞳には物騒な色が宿ってるような気がするのは。うん…気のせいじゃないはず。
それでも私の指先を振り払う事はせず、私のやりたいようにやらせてくれる。
「態々――…智王に会う必要があるか？」
伸ばした私の手首を右手で掴み、下に引っ張る。
「おっとー」
ぐいっと引っ張られ、体勢を崩した私の向かう先はあるの胸の中。
キランキランとセットしていない白磁の長い髪が宙を舞ってバッサー、と重力に逆らう事無く落ちていく。
確実に絡まった。やっぱ切りたいなぁ。切っちゃ駄目かなぁ？と、チラリ、とアルに視線を向けて見るけど、視線だけで却下されましたともっ。
バッサリと遠慮なく。

「どうして人の髪の毛を伸ばしたがるのよ。本人は心底面倒なんだけどねぇ？」
右手が掴まれたままだから、左手でアルの胸の辺りを押して脱出を試みてるんだけど、如何せん離してくれそうにない。
腕力勝負だとアルには完敗するし。かといってこの体勢は背筋が寒くなる気もするし。
イケメンはあくまで観賞用であって、パッと見抱きしめられているような体勢に持ち込まれたいわけじゃない！
「……色気の欠片もないな」
そんな事を考えてたら、上から溜息交じりの声が降ってきましたよ。失礼な。
「色気を求めないでほしいんだけど。そんなに色気が欲しいなら、ナイスなボディな眞族のお姉さんの所に行きなって。
そういう相手の一眞や二眞や三眞や四眞や五…」
「ちょっと待て！」
私の口から増えていく数に、アルが言葉を被せる。
「お前は俺をどういう目で見ている！」
どういう目って…。そりゃぁ…。
「こういう目」
きっぱりはっきりと言い切る私に、アルはガックリと肩を落とすのかと思いきや、何でか右手を離し――のはいいんだけどね。その後が問題だった。
べちゃ、と音をたてそうな勢いでアルの胸に私の頬が当たる。今懸命に顔を逸らしたけど、逸らさなかったら顔面強打だよね。
しかも、ガッチリと背中に両腕を回されて、身動き一つ取れない状態。抜け出す為にはアルが戒めを解いてくれるか、それか実力行使しかないわけだけど。
「俺に相手はいない」
ぅぎゃっー、と叫びそうになった声がアルの胸に吸い込まれ。耳

元で囁くように紡がれた言葉には全身の毛が逆立つ。
　勘弁してよ本当に。涙目になっちゃったでしょうがっ。

「アルの相手が１００や２００いても私にはまったく関係ないから、とりあえず離さない？」
　背筋は未だにぞわぞわ。
　しかも相手がいようがいなかろうが、私にはまっったく関係ないんだけどね。寧ろこういう事に免疫がないから、妙にむず痒いっていうか…。
　とりあえず離して欲しいんだけどなぁ。
「俺の話を聞いていたか？」
　離してくれる所か、更に続ける気ですよ。この眞。
「聞いてるから離して？」
「俺にそういう相手はいない」
「つまり…」
　童さんとか貞さんとかいうヤツですか。アルって確か１８０歳だよね。還暦真っ青だったよねぇ。
　あー。でも潔癖症っぽいもんね。なら納得と、自分の中で答えは出してたんだけどね。どうやらそれが全部筒抜けだったらしくて、ただでさえ凶悪な表情（カオ）だったのが三割増しになったというかね。
　あら怖い。

「格下を相手にする気はない」
　怖いお顔のアルからあっさりと言われた言葉はこれ。
　格下も何も……アルって眞族で一番強いんだよねぇ？　私を除いてっぽいけど。
「覇王といっても、近づこうと思えば近づける」
　またもやサラッと言われた言葉。
　アルの好みってある意味分かりやすいのかなと思ったりなんかするんだけどね。

「それに、力だけじゃないだろう？」
「だから耳元で囁くなっつーの」

そろそろ背筋を駆け抜ける寒さとかがね。我慢の限界にきていた私はというとですね……。
実力行使にでましたとも。
「はいはい。距離とって。私に色気をばら撒いても仕方ないでしょ」
距離をとって。の一言で日常会話呪文の発動条件はみたされる。いつのまにか部屋の隅に移動したアルに冷ややかな眼差しを向けた後、これ見よがしに溜息をついてみせる。
強制的に離れさせられたアルといえば、何処か不満気でね。
「つれないな、眞王」
「私、眞王って名前じゃないから」
前に言った事があるんだけどね。
私の名前を呼んだら考えるってさ。それなのに、アルは私の名前を口にした事がない。セクハラは軽くかます癖に。
「あのさぁ、アルヴァ。名前は呼ばないわ変態行為はやるわで、正直意味がわかりません」

アルっぽいけどね。
最後に言葉を付け足してから、答えを聞く前に完全に追い出す。一応ルヴァの隣りに転移させたから、なんだかんだといって話してるでしょ。

「よしっ。さっさと準備して出かけよ」
私の部屋には誰も近づかないように念じてから、髪を整える。櫛を通して後頭部の辺りで縛るだけの髪型。後は薄手のコートを羽織って終了。本当に普段着。鞄を持って近所の店に足りない物でも買いに行こうかなって程度の服装。
今日は朝っぱらからアルのセクハラ行為に、心身ともに疲労状態

に陥ったのね。だから、っていうわけじゃないと思うけど。多分。私は一人で出かけようかな、なんて軽く考えながら髪の色を誤魔化す。

白磁はいないのよね。やっぱり。遊宴っていう地球じゃない星だけど、色彩なんかは地球と大差ないみたい。

「お土産買ってくるからねー」

誰にも聞こえないんだけどね。一応いってきますの挨拶を。

「じゃ、智王の所まで誰にもばれずに会いに行ってみようかな」

で、あっさりと呪文発動。

それだけで、私の姿は宮殿から掻き消える。勿論、次の瞬間には智王の城。あぁ…忘れてた。

アルとルヴァは、宮殿で大人しく私のお土産を待っててね。その言葉をつけたした後、私の口からは笑いが漏れていた。

久しぶりの自由な外出！

お金はもってないけど、見てるだけでも楽しいよね。

「あ…初めまして？」

にんまりと不気味に笑う私の目前には、黒の髪の美男子が。この世界には見目麗しい奴しかいないのかなぁ、なんて疑問を抱くには十分な容貌。

アルやルヴァには負けるけどね。比べるものじゃないけど、何かが違うんだよね。眞族って。

「眞王様？」

初めは驚いたように目を見開いていた美男子だったけど、次の瞬間には蕩けるような微笑を浮かべてた。

パッと見爽やかそうに見えるんだけど、何でか腹黒に思えて仕方ないのは何でだろう。しかも声もいいね。腹に一物ありそうな声を

してるけど。
「うん。貴方は…智王だよね。お招きありがとう」
軽く上に上げた右手に出現させたのは智王からの招待状。
「いいえ。まさか眞王様が来て下さるとは思っていませんでした。我々の態度は不敬そのものでしたからね」

会ったばかりだから全然言葉を交わしたわけじゃないんだけどね。
第一印象はあながち間違ってないかなぁ、なんて思ったり。

「ハルちゃんと同じで、私の前で堅苦しい言葉使いは禁止。くだけちゃって。口上なんて面倒だから」

智王の頬が引きつったけど、そんな事なんて知った事じゃないとばかりに、私は呪縛をかける。
私は腹黒とかじゃないから、探り合いって苦手なんだよね。だから智王も同じ土俵でお話ししましょ。と笑みを浮かべながら言えば、完全に言葉を失う男の子が一人。
結構セコイ感じもするけれど。この際、私の方が上っていう立場に甘えさせてもらおうかな。

「さぁ…お話ししましょうか」

智王の部屋には私の楽しげな声が響くだけ。
この後智王がどうするのか。私の観察するような眼差しに対して、智王は真正面から視線を返してきた。
流石王様。侮れないね。

8話・眞王と智王

現在智王とのお話しタイム中。
流石智をいただく者だけあって侮れないっていうか、にこやか爽やかな笑顔が逆に胡散臭さを引き立てるというか。
もっと華奢なイメージを勝手にしてたんだけど、そんなに細くない。勿論細身には見えるけど、ルヴァみたいな細さじゃなくて…。なんだろう。魔法使いじゃなくて魔法剣士みたいな感じかな。
ゴリマッチョじゃなく細マッチョ。無駄のない筋肉がついてる気もするけど、その辺りでいうとアルの方が好み。
比べた時点で私が怒られるだけなんだけどね。
まぁ、今は必要ないからそれは置いといて…。

「さて。どうして王たちに知識が引き継がれていないのかな？　智王はソレを知ってる？」

私の問いは予想範囲内だったのか、智王に慌てるような様子は一切見られない。

「俺が知ってる理由としては、智王程眞王様の記憶を大事に保管してこなかったから、ぐらいだね。所で眞王様。せめて敬語はつけさせてほしいんだけど？」

「だめでーす」

いっきにくだけた話し方しか出来なくなった智王。これでオッケ

ー寧ろ問題なし。ごめんねー。敬語って苦手なの。格調高いとか格式があるとかそういうのも駄目。縁がないし、縁を持つ予定もないから勉強不足。

とはいっても、この星の礼儀と地球の礼儀をイコールで考えていいのかは分からないけど、敬語とかそういうのは共通するものがあるでしょ。

てなわけで、駄目、と笑顔で言い切れば、智王はやっぱり深い溜息を落とした。

「智王は、眞王様を敬愛してるんだ。だから他の二王に比べて知識を失われないように鍵をかけた。この星を創生したのも知ってる――けど、二王に教える気はない」

黒い笑顔を浮かべる智王。

うん。やっぱり人間側も1枚岩じゃないね。何となく、賢王や武王もそれぞれで何か企んでるんじゃないかなぁ、と思うのは考え過ぎ？

微妙な、綱渡り状態の均衡を保っている三国。眞王の出現が何を齎すのか。

「…賢王と武王。皆仲良しさん？」

心の中じゃ人間関係はどうかな、って思ってるのに、口から出るのは智王を試すような言葉。

この星の人間が眞族に害をなそうとするなら、7代目の仕掛けた罠を発動するだけ。七代目の仕掛けを罠と言っていいのかは微妙な所だけど、悠宴に住む人間にとっては罠、と言っても差し支えはないと思う。

私の言葉に、智王はにっこりと人懐っこい微笑を浮かべると。

「いいや。大嫌いだな。代々智王が敬愛する眞王様を。この星の管理者である眞族を、たかが――と言ってしまう愚か者の馬鹿と仲が良いわけがない」

「……くだけた話し方にしてって言ったけど、本音爆発しろ、と

は言ってないよ？」
思わずね。思わず智王のあまりにぶっちゃけ過ぎる発言に、私の頬が引き攣る。心の中に溜めといて何も言わずに影で暗躍するってのは好きじゃないけど、ここまでぶっちゃけちゃって大丈夫？という心配もあったりする。
足を組みなおした私に、智王は相変わらずの笑みを浮かべ、大丈夫、と迷わずに言い切った。
いや。智王が大丈夫なら良いんだよ。
私も他の王に漏らしたりしないからね。
聞かれても答えないし。っつーか、気になるなら本人に聞けっていうからいいんだけどさ。まぁ、元々接点もないからね。
「色々と大変だよねぇ。人間関係って。その辺りは介入する気はまったくないから期待しないでね」
智王が眞王に肩入れしていても、私は関わらない。迷いも戸惑いもなく言い切ってみれば、智王は予想通りとばかりに唇の端を上げて笑みを形作る。
焦りはない。焦燥もない。眞王が介入しない事を当たり前だと、そう思っている表情（カオ）。
「当たり前。あんな連中に眞王様を見せたくないし」
「というか…そこまで眞王が好き？」
にかっと、初めて見る智王の人懐っこい笑顔。
けれど初めて見る笑顔より何より、どうしてそこまで眞王に拘るのかっていうのが凄く不思議になってくる。
私も、眞王という自覚はない癖に眞族は愛しい。これが眞王の性（サガ）だと言われたら、そうなんだと素直に納得する事しか出来ない。それぐらい、何故か私にとっては当たり前の感情になっていたりする。だけど智王は違う。
別に眞王みたいに刷り込みがあるわけじゃない。あるわけじゃないのに、私という個人の人格さえも全て許容範囲と言わんばかりの智王の態度が気になる。

だから思わず尋ねてみた。
質問は簡単に。眞王が好き？のたった一言。
「勿論、といっても、今の眞王様はよく知らない。けれど俺たちの国は、眞王様の魔力に心奪われてる。言い方は悪いかもしれないけど、麻薬のようなものかな？」
「魔力に中毒性があるんだ…」
だからルヴァが私の魔力を浴びるのが好きなのかどうなのか。あぁ…うん。ルヴァの事を思い出しちゃいけないよね。
一気に背中が重くなった私を、智王が怪訝そうな眼差しを向けたんだけど、気にしないでとばかりに手を振っておく。
流石に、眞族の変態の対処法に困ってる、とは言えないし。
気を抜くと増える銅像に注意すべきか。わりと感じる視線を問い詰めるべきか。それともアルが盾になってくれなきゃ過度なスキンシップを求めるルヴァを叩きのめすべきか。
これからを左右するような重大な判断だと、思い出した案件――ルヴァだけど――には一時目を瞑っておく。
今、私の前には智王がいる。油断できない智王がいるんだから、ルヴァやアルの事はささっと脇に放置を決め込むつもりなんだけど…。

「考え事？」

初対面の智王につっこまれるぐらい、表情に出ていたらしい。思わず気まずそうな表情を浮かべたけど、次の瞬間には肩を竦めながらまぁね、と軽く言葉を返した。
「他愛ない日常の事だよ」
表情は崩しながらも、ちゃんと線を引く事も忘れない。
ここから先へは入ってこないでと、明確な拒絶。
「それよりも……戦争はなるべく回避してね？」
仲の悪さが露見した三王たち。恐らくこれは本当だと思って間違

いないと思う。綱渡りのバランスで保たれてた三国の均衡が破れれば、戦争が起こるかもしれない。
　眞国の図書館で人間の歴史の本を読んだんだけど、それには戦争があった。七代目が安定させるまでは、血で血を洗うような戦争があったらしい。戦争とは無縁の私だけど、テレビで見ていて気持ちの良いものじゃない。
「眞王様は戦が嫌い？」
　口調は軽かったけど、嫌だという本音がダダ漏れだったのか、智王が読めない表情で私に問う。
「嫌いだよ。今の私を阻む者はいないけどね。それでも、見るのも嫌だよ」
　規格外の眞王である私を阻む者はいない。元々、アルとルヴァが私の所まではこさせない。態々それを言う必要はないから、二眞の事は言わない。ハルちゃんから伝わってるかもしれないけど。
「……このままだと、戦争は起こりそうだけどな。今回の王は血気盛んというのが一つ。もう一つは、今までの王以上に眞族のシンジツを理解せず、汚らわしい魔だと忌み嫌ってる」
「ふむ」
「俺としては、眞族が二国を叩いた所で痛くは無い」
「そっか。まぁ、そうだろうね」
　智王の迷いにない口調。
　賢王と武王が眞族を嫌っているように、眞族に傾倒している智王は二王を嫌ってる。人間関係図を作成しちゃえば結構あっさりと作れそうだけど、如何せんこれで戦争になるのは好い気分がしない。
　眞族が負けるとは思ってないから言えるんだろうけどね。まだアルとルヴァ以外の眞族に会ってないからわからないんだよねぇ。
「まぁ…いっか。取りあえず今回は話しが出来て良かったよ」
　帰ってアルに怒られながらもどうするか考えよう。
　言いながら席を立つ私に、智王の瞳が一瞬翳ったけど…。
「眞王様…」

何処か懇願するような声音。
「眞族の領域には人を寄越さないように。私以外に見つかれば、消されちゃうよ。けれど一方通行の連絡はフェアじゃないね。情報だけ得たのに」
これは脅しでも何でもない。アルやルヴァは迷わず消す。私に気付かれないように彼らは出来てしまう。
「今じゃないけど、近いうちに遣いを寄越すよ。私に手紙を届けられるようにね」
「……」
「というわけで…またね」

滞在時間は30分程かな。
何処と無く後ろ髪ひかれる感じもするんだけど、これ以上はアルを止めれる気がしないんだよね。
智王にはお使いの鳥を早めに送ろうと自室に転移した直後、私は忘れ物をしている事に気付いた。

「…お土産忘れた」

もう一回行ってきていいかなぁ。人界見物してないなぁ…。

「駄目に決まってるだろう」

と、私のぶつぶつと呟く独り言未満に、律儀に答えてくれる声。
だからここは私の自室なんだけど？という当たり前の抗議はスルーされ。
「あれ？　日常会話呪文効かなかった？」
確かに発動したと思うんだけど。気付かれないように。
そんな私の疑問に、アルは首を横へと振った。アルの黒い漆黒の髪が左右に揺れる。

「眞王の不在を覇王がわからなくてどうする」
「…つまり、この件について呪文は無効だと？」
「諦めろ」

……。
それ、どうなんだろう？
自信満々に言い切られても困るんだけど。
しかもさっき気まずかったよね？
気まずかったのは私だけですか？？

「眞王。諦めろ」

視線だけで問う私に、アルはもう一度、念を押すように言葉を紡ぎながら笑みを浮かべた。
有耶無耶にする気なのかどうなのか。

「まぁ…いっか」

こんな腹に抱えてそうなアルの笑みだけど、何でかホッとするからいっかと、私も笑みで返しておいた。

9話・地球の文明

小鳥の囀りが聞こえてきそうな清々しい朝の光を頬に浴びながら、私は薄っすらと目を開けた。

そう、薄っすらとね。

本来ならば気持ちの良い朝の光景だろうけど、何故か最大級に脳裏で鐘が鳴っているのは何でかな。そんな警報に疑問を持つ事なく、私は用心しながら薄めで状況を確認してみる。

いた。

警報の原因。

部屋の片隅に佇んでいるのは、見た目だけは絵になるルヴァ。その実態はやっぱり変態一号という名に相応しい働きをしてくれる３２５歳。

銀色の髪が朝日の光で煌いているのがまた神秘的……なんて言う筈がない！！

がばりっ、と勢いよく布団を蹴り上げ、私は遠慮なく手を翳す。

「ルーヴァー……何でここに居るのか聞いてもいいかな？」

言葉は丁寧だけど、実際は吐かすけどね。

力ずくで。

にっこりと満面の笑みを浮かべる私とは対照的に、ルヴァはその表情に影を落としながら私だけを見つめている。
ここに来てからすっかりと慣れたのか。
それともルヴァ本来の変態イメージが強すぎるからなのか。
これだけの美形を目の前に、まったくときめいたりしないのがまた残念というかね。折角ならドキドキワクワクとしてみたい。
本来の年齢は結婚適齢期っぽい年代。今は力が安定するという理由から１９歳という外見だけど、人間の２８歳。しかも自分で商売してるから精神的には結構落ち着いてるはず。とはいっても、ある意味落ち着き過ぎて、恋愛ごとを片っ端から受け流しているような気がしないでもないけど。
っと、話しが逸れたかな、なんて思いながらもう一度ルヴァを見てみる。
相変わらず、その表情には影を落としてるけど、その影の理由は何だろうね。碌でもない気がしないでもないのは何でかな。

「眞王様。最近、私とお会いできる時間が随分と減りましたよね？」
「そう？　ルヴァを見ない日はなかったと思うけど？」
「眞王様。最近、覇王様も随分と仲良くなられたようですね？」
「そう？　変態二人と仲良くなった気はまったくしてないけど？」
この間、にっこにことお互い笑顔を浮かべてたりとか。
その割りに、言葉には冷たい何かが宿っていたりとかね。
まさしく水面下での攻防戦に、私はまったくの緊張感もなく口角を吊り上げた。

「ルヴァ。最近はこの変態込みでルヴァっていう感じがするから、あんまり気にならなくなってきたんだけどさ……会う時間が減ったのも何も、ルヴァが柱の影からジッと見る時間が増えただけでしょうに」

最近はそのストーカー行為につっこまなくなったから、会話の時間が減ってるのかもしれないけど、元々あれが会話だと認めるつもりはない。

そう言えば、細長い指を顎に持っていき、ふむ、と考える素振りを見せた。きっと今までの行動を思い返しているんだろうけど、なんだろう。

寒気が追加された気がする。

「そうですね。最近覇王様とお話しする時間が増えたような気がして焦りましたが……眞王様のメモリアルは無事増え続けていましたね」

不吉な。そう、不吉な響きを持つ言葉を発すると、ルヴァはウットリとした眼差しを自分の懐へと向けた。

「強制回収。ルヴァは行動禁止」

反射的に日常会話呪文を発動し、私はルヴァの言うメモリアルを手にしながら、ウゲ、と声を漏らした。

犯罪スレスレの写真の数々。というか、デジカメ？　地球で購入してきたの？？

そんな私の心の声を読んだかのように、ルヴァはウットリとしたままコクリ、と一回頷いた。

「あれは、便利ですね。電気というものを使った道具で簡単に、そして鮮明に写せるのがまたいいです」

というか、コイツはパソコンとかを使いこなしてるのか。

一体、こんなファンタジーな世界で何をやっているのか。取り入れられる文明はなんでも有りなのか。

それじゃあ私のパソコンを持ってきても使えるんじゃないかと、そんな当たり前の感想に思い当たった所でルヴァを解放した。勿論、放る場所は外。

当然メモリアルは没収したままだけどね。多分データで保存しているとは思うんだけど、そこまで消去すると何をするか分からない。それが、ルヴァという眞だと思ってる。

あんまり追い詰め過ぎるのも良くないっていう理由からだけど、何でそんなに眞王が好きかなー、って疑問に思ったりもしたりするけどね。

ルヴァみたいな行動や感情は行き過ぎてるとも思うけど、そこまでの感情を抱いた事もないからちょっと羨ましいという気もする。変態さんの仲間入りはごめんだけど。

「……っと、そろそろ着替えて外に出ないと、アルまで来ちゃうかな」

ここに来てからというもの、本当の意味でのプライベートな空間は無い。

私が一人でいる事を恐れているかのように、アルとルヴァが付きまとう。

「さて……と、その辺りも調べたいしねぇ」

七代目が残したモノはかなりのもので、調べれば調べる程。彼に

近付けば近付く程、ある一つの疑問にぶち当たる。
それを二眞には言っていない。
確証がないというのが主な理由だけど、もし、それが本当だった時にどうなるかがまったく想像がつかないんだよね。
本能的な部分でソレを感じ取っているから、私に付きまとうのかもしれないけど。
軽く着替えて、ルヴァのお宝写真集を燃やしつつ、私は部屋の外で待っているアルに笑みを向けた。
もう少し遅いと、部屋の中に踏み込んでくるんだよね。

「おはよ、アル。中間管理職のお仕事はいいの？」

「部下に任せてある。お前が馴染むまで、お前と共に在るのは覇王の仕事だ」

「へぇ…」

何に馴染むの？とは聞かないけどね。

「じゃ、他の眞族に会えるまで護衛よろしく。明日、人界ツアーに出かけるからねー」

「は？」

「一人で行くから大丈夫」

「何が大丈夫だ？」

「アルが無理して人の世界に足を踏み入れなくても、っていう意味だよ？」

「却下だ！　許すわけがないだろう」

前はね、ただ人間を毛嫌いしてるのかと思ってた。
今は、ちょっと違うかなって思ってる。

「じゃ、姿変えて一緒に行こうよ。アルを置いてくと、説教が長くて嫌なんだよねぇ」

さて……と、絶句してるアルを置き去りにして、とりあえず朝食かな。いつも通りの私好みの味に舌鼓を打ちながら、意外と復活の早かったルヴァとアルに目線を移しつつ、にまり、と笑ってみせた。

というかさ、ルヴァ……メモリアル復活早くないかな？

ルヴァに、地球の文明に慣れ過ぎてない？とつっこむべきか。

それとも微妙な顔色のアルに、何が衝撃だったの？と言うべきか。

迷うよねぇ、なんて呟きながら、デザートの果実の程よい甘さに、頬を緩めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8390m/

幻視の森

2011年6月20日21時33分発行